はじめに1

国公立大・私大の標準的な難易度でしかも良質な文章と設問を素材にした講座を編成しました。記述・選択肢・傍線部説明・空欄補充・知識モノなどバランスよく設問を選んでいます。また、既存のアーカイブ講座ではあまり扱っていない、**〈小説の記述問題〉**も一つ入れました。センター試験でおなじみの小説ですが、国公立大・私大でも意外によく出題されるため、夏のこのタイミングで取り組んでおきましょう。なお、論説・評論の筆者は、それぞれの学問分野を代表し入試にも頻出という、いわゆる「学界のアイドル」ばかりです。読書的な価値の高い文章ばかりということです。

【このライブ講座からはじめて小柴大輔担当の現代文を受講する生徒さんへ】

論説も小説もすべての文章に対して**「対比（比較）」**注目するという、現代文読解と解答の方法を提唱しています。わかりやすく解説するよう努めてまいりますが、いきなりライブ参加の前に、アーカイブの何らかの講座をちょっと見ておくことをおススメします。**『センター対策講座』『スタンダードレベル現代文』『トップ&ハイレベル現代文』『高1・高2現代文**（「高1高2」という講座名ですが採用している問題はすべて入試問題です）**』**いずれの講座でもかまいません、第一講を視聴してウォームアップしておきましょう。ライブ講座を最大限実りあるものにしましょう。ライブ講座の後、アーカイブの続きを視聴し、入試用の現代文対策の学習習慣を定着させましょう。

はじめに２

過去のライブ授業にて、よくある質問

質問１：「現代文の知識事項、たとえば漢字や語彙の対策もするべきですか」

回答：するべきです！　センターであれ、国公立大・私大の個別入試であれ、無視できない配点です。また論説・評論において問われる漢字は、重要概念であることが多く、文章理解とも直結しています。

質問２：「知識事項の勉強はどう進めたらよいですか」

回答：『**現代文〈重要語句・知識編〉**』という講座があります。テキストだけでもダウンロードしましょう。漢字・慣用句・口語文法・四字熟語・文学史さらに接続語の空欄補充問題もたっぷり練習できます。さらに文学史については『**早大現代文**』のテキストも参照してください。

なお市販の書籍としては、小柴大輔著『**読み解くための現代文単語**』（文英堂）があります。評論用語と小説用語の両方をカバーし、イラストも二〇〇カット！　また、評論と小説の読み方と解き方のコンパクトな総まとめとして、小柴大輔著『**一冊で現代文の読み方＆解き方が面白いほど身につく本**』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）があります。合わせてご参照ください。

予習について

予習（問題にアタック）しましょう。**あえて時間限定せず、じっくり解答してもOKです。**

復習の仕方について

間違えた部分について、同種の問題が本番でも出題されるというつもりで、見直してください。

授業中のノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。赤／青／緑の三色をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。

解法の手順……文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……

少しでもはやく確実に読解するために

1　本文末の**書名＝タイトルを見る**　→　**テーマが判明**することが多い。さらには、「○○と○○」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。とくにセンター試験現代文では必ず記載されます！　論説では文章の終わりに、小説では冒頭に書かれるのが普通です）。

2　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわることが多い**）。ただし**選択肢まで読んではダメ**。五択で四つは誤りの選択肢なのだから、先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

★小説の問６のみ、選択肢まで読んだ方が有益です！

（**3　本文最後の数行を先に**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。）

1と2で充分な見当がつけば、4に移行してOK

4　**本文を冒頭から読む**

プランA……設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

プランB……プランAだとぶつ切りで文章理解のリズムが壊れるとお感じの人は、全文通しで読んでから各問に取り掛かってもよいです。とくに空欄補充をたくさん出す私大と異なり、センター国公立大個別試験の場合は、まるまる文章を読ませますから、プランBもあり。

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り** ……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**といってもいい。

2 **同一性分断の誤り** ……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り** ……本文中で**「A↔B」**という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、**「C↔D」**といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は**「善↔悪」**という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断** ……本文中の記述がないのに、**「すべての○○は」「あらゆる○○は」**と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断** ……本文中の記述がないのに、**「○○のみ」「○○だけ」**と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**があります。例えば本文では「人間関係全般」について書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断** （不当な当為判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、**「○○であるべきだ」「○○にしなければならない」「○○する必要がある」**と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aの方が優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を使う必要があるんだよ。

7 **部分的指摘の誤り**

……本文中では、「**AとともにB**」「**Aと同時にB**」「**AしかもB**」と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り**

……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なしの誤り**

……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1～8・10～12のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り**

……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り**

……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り**

……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝(ひざ)がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

13 **具体例は、一段、落ちる**

……具体例を挙げている選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっとまとまった語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

14 **比喩による説明は、一段、落ちる**

……たとえで説明している選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない。もっと明示的な語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

目次

第一講　小説　記述編……p.8
第二講　論説　哲学……p.16
第三講　論説　記述編　哲学・心理・コミュニケーション論……p.28
第四講　論説　芸術論……p.34
第五講　論説　政治論……p.48

第一講　小説　記述編

次の文章は、原田宗典の「小さく大きな舞台」の全文である。これを読んで、後の問に答えなさい。

それはもともと彼の望んだ職場ではなかった。

全国に何百というビルを所有しているその会社に就職した時、彼は新しい都市計画などを立案し実行するプロジェクトチームの一員として働くことを希望した。何千何万という人々の集う器を作り、周囲の環境を整え、滞りなく運営していく。それはきっと①神のように創造的で、手応え(てごた)のある仕事に違いない。彼はそう思っていた。

内定をもらった日、彼は生まれて初めて東京タワーに上った。そして第二展望台から東京の街を見下ろし、②自分がこれから創り上げていくであろう街の姿を想像して、何ともいえない興奮を覚えた。確かに子供っぽい想像には違いなかったが、夢としては上質の部類に属するのではないかと、彼は自分を褒めてやりたい気分だった。

しかし現実のスケールは、彼の夢を千分の一に縮小したような規模だった。入社してすぐに彼は管理課へ回され、研修期間を終えると同時に、会社が所有している都内の劇場に[注一]出向させられたのだ。

それは気が抜けるほど小さく、古ぼけた劇場だった。客席数二百七十。劇場と呼ぶのもおこがましいほどの規模だ。主にお手軽な講演会や会社のセミナーなどに使用されるらしく、照明機材や音響などの設備もお粗末なものだった。

彼はひどく失望した。

こんな所へ出向しても、彼にはやるべき仕事もない。何かを創り上げるわけではなく、既に出来上がっている器を貸し出して、料金を受け取るだけの仕事だ。そんなことは高校生のアルバイトでもできる。実際この劇場のスタッフは、事務を担当する二人の臨時雇いの女性と、支配人と呼ばれる上司と彼の四人で成り立っていた。しかもこの支配人というのがまったくやる気のない男で、劇場にはほとんど顔を出さずに、近所のパチンコ屋でぼんやり玉を弾(はじ)いてばかりいる。おかげで彼は着任早々、劇場のすべてを一人で運営しなければならなかった。

「ああ、厭(いや)だ厭だ」

臨時雇いの中年女性二人は、口癖のようにそう呟(つぶや)きながら机に向かう。血の繋(つな)がりはないはずなのに、二人は容姿も性格も驚くほど似かよっていた。確かな年齢は分からないが二人とも四十代の後半で、独身らしい。一週間に一度美容院へ行くことを無上の楽しみとしていて、異様なほど化粧が濃い。この二人と机を並べて[注二]帳簿などをつけていると、彼は自分が年老いた税理士にでもなり果てたような脱力感を覚えるのだった。

退屈な一年が過ぎた。

彼が本気で転職を考え始めたある日、劇場にちょっとした変化が訪れた。見ず知らずの若い劇団から、ホールを使用したいという打診があったのだ。もともとこの劇場は親会社の関連会社のみに貸し出す方針であり、公に使用を認めているわけではなかったので、無関係の劇団などから打診が入ることは皆無だった。それが、どこで聞き齧(かじ)ってきたのか、その若い劇団の座長は何のコネクションもなしにいきなり電話をかけてきたのだ。

支配人が受けたのなら、絶対に首を縦には振らなかったろう。しかし幸運にも、電話を取ったのは彼だった。そしてこのささやかな変化に、賭(か)けてみる気になった。

彼は退職を覚悟の上で、その若い劇団に一週間ホールを貸す約束をした。後になって本社の人間からあれこれとケチをつけられるに決まっていたが、(1)今さら意に介す必要もなかった。

そして劇団の公演の日がきた。

いつもホールを使用する人種とはまったく違う、若く生き生きとした人間が劇場に集まり、舞台装置の仕込みが始まった。その頃になって、支配人はようやく事態を呑(の)み込み、青い顔で彼を叱(しか)った。

「すべて君一人の責任だからな」

支配人はそう言い残して、事務所に引っ込んだ。

彼は痛快だった。じっとしていられなくて、背広姿のまま、劇団の連中に混じって仕込みを手伝ったりした。芝居の演目はシェイクスピアの[注三]「リチャード三世」で、舞台上には中世の城の一室を想わせるセットが組まれた。照明機材が運び込まれ、実際に明かりを当ててみると、そのセットは目を見張るほどリアルに浮かび上がった。

彼は、自分の劇場がこんなにもすばらしい物を造り出す可能性を秘めていたことを知って、唖然(あぜん)とした。劇団員たちは衣装を

つけて、セットの中で嬉々（きき）として跳ね回り、彼をますます驚かせた。

その夜。

事務所の連中も劇団員もいない、がらんとした劇場の客席に、彼は一人座っていた。薄明かりの中に浮かび上がる舞台上のセットをしばらく眺め、それから静かに立ち上がる。舞台へ上り、中央に立ってみる。そして昼間見た劇団員たちの動きを模して、動き回ってみる。

まるで中世の偉大な王になったような気分だった。彼は舞台上をくまなく歩き回り、上手（かみて）に設（しつら）えられた塔のセットの上に立った。見下ろすと静まり返った客席は、いつだったか東京タワーの上から見た東京の街に似ているように思えた。わずか二百七十席にすぎない小さなこの劇場の中に、東京がすっぽり収まっているようだ。

――もうしばらく、この劇場にいてみよう。

彼は思った。

――この小さな劇場の小さな舞台に、どれくらい大きなものを入れることができるのか、試してみよう。

その瞬間、（2）<u>彼の胸の裡（うち）にある幕が静かに上がり、遠い喝采（かっさい）が聞こえてくるような気がした。</u>

（原田宗典『小さく大きな舞台』による）

注一　出向＝籍をもとのところにおいたままで、命令によってよその会社につとめること。

注二　帳簿＝お金や品物の出し入れを記入する帳面。

注三　「リチャード三世」＝イギリスの作家シェイクスピア作の歴史劇。

問１　この作品は、様々なものが対比的に表現されている。波線部①②に対比されているものを本文中から抜き出しなさい。

①　神のように創造的で、手応えのある仕事　↔

②　自分がこれから創り上げていくであろう街の姿　↔

問２　傍線部（１）のように考えたのは、「彼」のどのような心境からか、本文中の表現をふまえて説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問３　この小説は、「彼」が「ささやかな変化」を契機にそれまでの状態から変容していく姿を、変容する前の場面（第一の場面）、変容のきっかけになった出来事の場面（第二の場面）、変容していく「彼」を描く場面（第三の場面）の三つの部分として描いている。以下の①②③の問に答えなさい。

①　第一の場面と第二の場面とをつなぐ一文を抜き出しなさい。

②　第二の場面と第三の場面とをつなぐ一文を抜き出しなさい。

③　また、第三の場面は、さらに前半と後半とに分けることができる。その間をつなぐ一文を抜き出しなさい。

問４　傍線部（２）は、「彼」のどのような心境を象徴しているか、わかりやすく説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問５　この小説の題名「小さく大きな舞台」には、どのような意味が込められているか、わかりやすく説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

知識モノ解説

文学史・人物紹介

●原田宗典＝はらだ　むねのり（一九五九〜）東京生まれ、早稲田大学第一文学部演劇学科卒。小説家の原田マハ氏は、宗典氏の妹。よく混同される『ぼくらの七日間戦争』など「ぼくら」シリーズの筆者は、宗田理（そうだおさむ）

●ウィリアム・シェイクスピア（一五六四〜一六一六）イギリスを代表する劇作家。『ジュリアス・シーザー』『ロミオとジュリエット』『夏の夜の夢』など作品多数。『ハムレット』『オセロ』『リア王』『マクベス』は四大悲劇と呼ばれる。日本語訳者としては、坪内逍遙（つぼうちしょうよう）・小田島雄志（おだじまゆうじ）・木下順二（きのしたじゅんじ）などが有名。とくに小田島氏は、個人による完全訳の最後の原稿を、なじみの喫茶店で書き上げたエピソードはよく知られている

語句

おこがましい→身のほど知らずに思い上がっているようで恥ずかしい

粗末＝そまつ→見るからに安っぽくみすぼらしい

無上＝むじょう→この上ないこと。最上。同音異義語の「無常」は変化せずこのままのものは何もないという仏教思想の一つ。「無情」はなさけや人間らしい感情がないこと

打診＝だしん→本格的な交渉に入る前に様子をうかがうこと。問い合わせること

皆無＝かいむ→まったくないこと

聞き齧る＝ききかじる→どこからかちらっと聞いて知っていること。類義語「小耳にはさむ」

コネクション→強い関係や背後の力

首を縦に振る＝くびをたてにふる→うなずくこと。賛成すること。同義語「首肯（しゅこう）する」

仕込み＝しこみ→準備や訓練をすること

唖然＝あぜん→驚いて声が出ない様子。通常、悪い意味で使うが本文では好ましい驚きで使われている。類義語「驚愕（きょうがく）」

くまなく＝隈なく→すみずみまで目がゆきとどいている

上手＝かみて→客席から見て舞台の右側

復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）情報収集しシュウ職に備える　①周　②酬　③修　④就　⑤襲
（イ）前例通りでソウ造的ではない　①創　②想　③壮　④総　⑤燥
（ウ）未来への長期的テン望を語る　①天　②典　③転　④添　⑤展
（エ）試合の成り行きに興フンする　①噴　②奮　③吻　④紛　⑤憤
（オ）外部からの注文はカイ無である　①戒　②階　③界　④壊　⑤皆
（カ）現物をシュク小して表現する　①縮　②宿　③祝　④粛　⑤淑
（キ）現場に出る前にケン修を受ける　①験　②険　③研　④賢　⑤検
（ク）関係者がリン時に集められる　①倫　②鈴　③鱗　④隣　⑤臨
（ケ）髪型やヨウ姿が気になる　①要　②養　③庸　④洋　⑤容
（コ）来年の都合について打シンする　①深　②診　③審　④身　⑤振

第二講　論説　哲学

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

思想的なパラドックス効果の実験室

　きみの眼のなかの塵（ちり）こそはこの上ない拡大鏡の役目をしているのだ。

右の文は、*1テオドール・W・アドルノの『ミニマ・モラリア』に見いだされる断章である。これは、新約聖書マタイ伝第七章三にある「なぜ、兄弟の眼にある塵を見ながら、自分の眼にある梁（はり）を認めないのか」という一節をふまえながら、そこにアドルノ独特のひねりをかけたものだ。

これは一見、謎（なぞ）めいた一文にみえるかもしれない。アドルノ的「ひねり」の意図を深読みすると、こうした警句も、またアドルノの哲学全体も、まるで一種の神秘思想のように見えてくるだろう。けれどもこれはもしかすると、かれの読者たちはとても謎が好きだ、ということを反映しているだけかもしれない。

たしかにアドルノの哲学はその悲観的かつ救済的な側面ばかり強調されることが多い。けれどもかれの哲学的文体には、周知の名言にわざと逆説や否定による変形を仕掛けてみて、そこからどんな効果が出てくるかを実験しているような、無邪気な側面がある。それはちょうど、『モナリザ』に髭（ひげ）を描く*2マルセル・デュシャンのようなものである。

哲学であれ美術であれ、こうした無邪気ないたずらと深刻な現実否認とが表裏一体になっていること――これが文学や芸術における二〇世紀の新傾向、つまり「*3アヴァンギャルド」のスタイルの本質的特徴であると言えるだろう。

アドルノの著作中でも、とりわけこの『ミニマ・モラリア』という作品は、思想的なパラドックス効果の実験室ともいえるものだ。右に引用した一節のすぐ後に、しばしば引用される「全体は非真理である」という一句が登場する。

これはヘーゲルの『精神現象学』にみられる「真理は全体である」という命題を逆転かつ否定したものである。けれどもそれ

は、ヘーゲル的な観念論に対する単純なアンチテーゼではない。「全体は非真理」であるという文は、それが「真理は全体である」という文をふまえている以上、そのオリジナルと対等の資格で反対の主張をしているのではない。

アヴァンギャルド的な転倒の手法は、権威をもつオリジナルに単純に反逆したりそれを揶揄したりするものではなく、むしろオリジナルをきわめて真剣に受けとることから出発し、そのことによって、オリジナルの中に潜在している別な可能性を展開してしまう点にある。そこにアヴァンギャルド的メッセージの衝撃力がある。

「啓蒙」のレトリック

さて、冒頭に引用した文に戻ってみよう。この場合のオリジナル、つまり福音書の記述はいったい何を言っているのだろうか。「なぜ、兄弟の眼にある塵を見ながら、自分の眼にある梁を認めないのか」。素朴に道徳的な解釈をするなら、この聖書の一節は、自分のことをたなにあげて人を批判することの非を戒めるものとして読めるだろう。

あなたの眼は先入観や固定観念のために曇っている、だからわたしがそれを取り去って、よく見えるようにしてあげよう——こうしたお節介な口調は、現代のわれわれにはきわめてなじみの深いものだろう。それは「こんな良い商品を知らないあなたは損をしている」と言うコマーシャリズムの中にも、「世界はこんな大変なことになってるのにあなたは何をしているのか」と詰め寄る新興宗教や慈善運動の勧誘の口ぶりの中にも、また社会悪を告発すると称するジャーナリズムの「真相暴露」や、「あなたは知らないが今のトレンドはこうなのだ」と教えてくれるマスコミの言説の中にも聴くことができる。そしてわれわれ自身も、「社会」や「人々」に向かって何かを言おうとすると、しらずしらずのうちにそうした話し方になってしまっている。

どうしてそんなことになってしまうのか。それは「兄弟の眼にある塵を見る」ことが、近代的意識そのもののあり方に深く関わっているからだろう。

迷妄の打破は、「近代」が「過去」を断罪するときに利用する一般的な言い方、つまり「啓蒙」のレトリックに属している。過去の人々は宗教的*4ドグマや迷信のために曇らされてきた。わたしがそれを取り除いて、世界のありのままの姿を見せてあげよう、というわけである。

二〇世紀においては、かつて「偶像破壊」の旗印であった古典的な啓蒙思想が、かつての宗教的権威にかわって決別すべきド

グマの役割を負わせられることになる。すなわち、デカルト的な心身二元論からの脱却とか、カント的理性主義の克服というふうにである。近代思想とは、過去を否定するこうしたパワーによって進展してきた。

そのことを一概に悪いとか間違っているとか言うことはできない。ただ確かなことは、本当に透徹した近代意識は、過去を悪者あるいは無知蒙昧（むちもうまい）な存在に仕立て上げたことに対して、実は深い後ろめたさをも同時に感じてきたことである。

「自分の眼には梁があるのに、どうして兄弟にむかって、あなたの眼から塵を取らせてください、と言えようか。偽善者よ、まず自分の眼から梁を取りのけるがよい」（マタイ伝第七章四～五）。

啓蒙と進歩の意識の背後には、つねにこうした声が響いている。伝統を批判する自分の眼こそ、本当は手に負えない先入観にとらわれているのではないか――こうした良心の呵責（かしゃく）を考えに入れなければ、近代思想を本当の意味で理解することはできない。

判断というものの本質

さて、最初に引用したアドルノの断章は、聖書の言葉に奇妙な変形を加える。すなわちそのオリジナルでは「塵」は第三者（「兄弟」）のものであるのに、それが「きみ」つまり読者のものとされている。

だがより重要な点は、それが「眼にある」ということの持つ認識論的な意味を強調しながら、道徳的な意味を奇妙な形でずらしてしまうことである。「塵」とはそもそも取り除くべき障害などではなくて、それこそがよりよく見ることを可能にしている条件なのではないか、というのだ。

そしてさらに興味深いのは、こうしたアドルノによる変形を理解した後で聖書のテクストに戻ると、それがまったく別な認識論的洞察として読めてしまうことである。

あなたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたが量るそのはかりで、自分も量り与えられるであろう（マタイ伝第七章二）。

判断は自分にはね返ってくる、つまりわれわれは対象を判断したつもりでも、実は自分自身を判断したことになる、というのである。これは「だから他人をむやみに判断してはいけない」といった道徳的教訓を越えて、判断というものの本質に触れては

いないだろうか。

それは、判断はその本性からして反射＝反省的であるということである。他者を見る眼には、自分とは何者かということが含まれている。神ならぬ有限な存在者である人間にとって、判断から「自己」という要因を消去することは不可能なのである。

（吉岡洋『〈思想〉の現在形』による）

注

＊1　テオドール・W・アドルノ＝ドイツの哲学者。（一九〇三〜一九六九）

＊2　マルセル・デュシャン＝フランス（後に渡米）の美術家。『モナリザ』に髭を書き加えた作品『L.H.O.O.Q.』や、レディ・メイドと呼ばれる既製品をオブジェとして提示した作品で知られる。（一八八七〜一九六八）

＊3　アヴァンギャルド＝前衛的な芸術運動。

＊4　ドグマ＝教義。

問1　「「アヴァンギャルド」のスタイルの本質的特徴」とはどのようなものか。最も適当なものを選択肢から一つ選びなさい。

a　『モナリザ』に髭を描くマルセル・デュシャンのように、権威のあるものにささやかな変形を加えて、既存の権威を揶揄するという特徴。

b　『モナリザ』に髭を描くマルセル・デュシャンのように、一般人になじみ深いものにささやかな変形を加えて、日常世界と芸術世界の連続性を示すという特徴。

c　『モナリザ』に髭を描くマルセル・デュシャンのように、周知のものにささやかな変形を加えて、既存のものの見方とは別の、新しい解釈の可能性を示すという特徴。

d　『モナリザ』に髭を描くマルセル・デュシャンのように、美の象徴とされるものにささやかな変形を加えて、美とは何かを問いただすという特徴。

e　『モナリザ』に髭を描くマルセル・デュシャンのように、古典として評価の定まったものにささやかな変形を加えて、その評価の上に現代的な意味を付加するという特徴。

問2　「啓蒙」のレトリックによって意図される表現効果の例として、最も適当なものを選択肢から一つ選びなさい。

a　「こんな良い商品を知らないあなたは損をしている」と言うコマーシャリズムのように、人々の不明を断じて新しい商品に関する知識を与えることにより、人々の購買欲を誘う。

b　「世界はこんな大変なことになってるのにあなたは何をしているのか」と詰め寄る新興宗教や慈善運動の勧誘のように、世の中の問題点を誇張して伝えることにより、人々の宗教への不信感をかき立てる。

c　社会悪を告発すると称するジャーナリズムの「真相暴露」のように、社会の暗部を明らかにする報道を行うことにより、人々のジャーナリズムに対する嫌悪感をあおる。

d　「あなたは知らないが今のトレンドはこうなのだ」と教えてくれるマスコミの言説のように、世の中の流行に関する人々の情報の欠落を埋めることにより、人々の流行に対する反抗心を促す。

e　「社会」や「人々」に向かって何かを言おうとするときに、社会のかかえるさまざまな問題や人々の迷いを誇張して指摘することにより、人々の社会問題に対する無関心を生み出す。

問3　近代的意識のあり方を、筆者はどのように捉えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選びなさい。

a　過去の人々が宗教的ドグマや迷信にとらわれてきたことを断罪する一方で、デカルト的な心身二元論やカント的理性主義をも否定し、常に思想的な進歩を続けている。

b　迷妄の打破という「啓蒙」のレトリックを用いて「過去」を断罪する一方で、同じレトリックで自身が否定されることをも念頭に置いている。

c　迷妄の打破という「啓蒙」のレトリックを用いて「過去」を断罪する一方で、アヴァンギャルド的な転倒の手法で、オリジナルの価値を確認しながら、その中に潜在している別な可能性を展開する。

d　デカルト的な心身二元論やカント的理性主義を否定する一方で、アヴァンギャルド的な転倒の手法で、オリジナルの価値を確認しながら、その中に潜在している別な可能性を展開する。

e　デカルト的な心身二元論やカント的理性主義を否定する一方で、それに代わる新しい思想を展開することに困難を感

じている。

問4　「きみの眼のなかの塵こそはこの上ない拡大鏡の役目をしているのだ。」というアドルノの断章は、オリジナルの聖書の一節をどのように変形したものとなっていると筆者は捉えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選びなさい。

a　オリジナルの聖書の一節では、「塵」は「兄弟」のものであるのに、アドルノの断章では、それが「きみ」のものとされており、第三者への批判を戒め自分自身への反省を促すものとなっている。

b　オリジナルの聖書の一節では、「塵」は「兄弟」のものであるのに、アドルノの断章では、それが「きみ」のものとされており、読者を直接啓蒙するものとなっている。

c　オリジナルの聖書の一節では、「兄弟の眼にある塵」は「自分の眼にある梁」に比べれば認識上の問題は小さいとされているが、アドルノの断章では、「塵」であっても私たちの認識を大きく左右する条件とされている。

d　オリジナルの聖書の一節では、「兄弟の眼にある塵」は「自分の眼にある梁」に比べれば認識上の問題は小さいとされているが、アドルノの断章では、「塵」こそはよりよく見ることを可能にしている条件とされている。

e　オリジナルの聖書の一節では、「塵」は第三者にとっての認識上の障害であるとされているが、アドルノの断章では、それが人間一般にとっての認識上の障害であるとされている。

問5　アドルノによる変形を理解した後で聖書のテクストに戻ると、元のテクストはどのような読みが可能になると筆者は捉えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選びなさい。

a　「兄弟の眼にある塵」を見ている自分自身の眼に「梁」があることに気づくべきだ。すなわち、他人をむやみに判断してはいけない。

b　「兄弟の眼にある塵」を見ている自分自身の眼に「梁」があることに気づくべきだ。すなわち、他人への判断には判断する者の主観が含まれている。

c　「兄弟の眼にある塵」を見ている自分自身の眼に「梁」があることに気づくべきだ。すなわち、他人の欠点はよく見

えるものだ。

ｄ　「兄弟の眼にある塵」を見ている自分自身の眼に「梁」があることに気づくべきだ。すなわち、他人を批判する前に自分自身を反省しなければならない。

ｅ　「兄弟の眼にある塵」を見ている自分自身の眼に「梁」があることに気づくべきだ。すなわち、他人への判断には判断する者の独自の視点が必要だ。

問６　判断の本性は「反射＝反省的」であるというがどういうことか、五十字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

知識モノ解説

文学史・人物紹介

●吉岡洋＝よしおか　ひろし（一九五六～）京都生まれ、京都大学文学部哲学科美学専攻、同大学院博士課程修了。京都大学大学院文学研究科（美学・芸術学）教授

●ヘーゲル（一七七〇～一八三一）フルネームは、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲル。理性主義の哲学の完成者と呼ばれる。主な著作『精神現象学』『法の哲学』『歴史哲学講義』。難解で有名だが良質な入門書として、『ヘーゲル・大人のなりかた』（ＮＨＫブックス・西研（にしけん）著）などがある

●ルネ・デカルト（一五九六～一六五〇）近代哲学の父と称される一方、数学者でもあり、傭兵でもあった。主な書作『方法序説』『哲学原理』（この中に「われ思うゆえにわれあり」が出てくる）

●イマヌエル・カント（一七二四～一八〇四）理性主義哲学の中心人物だが、理性の権能、特徴を厳格に確定しようとした著作で知られる。主な著書『純粋理性批判』『実践理性批判』『永遠平和のために』

語句

断章＝だんしょう→詩や文章の断片

警句＝けいく→短い形で真理を表現したことば。アフォリズム。類義語「格言（かくげん）」「金言（きんげん）」「箴言（しんげん）」。ただし「箴言」はいましめの意味が強い

梁＝はり→屋根を支える長い材木

周知＝しゅうち→広く知られていること。同義語「人口（じんこう）に膾炙（かいしゃ）」

逆説＝ぎゃくせつ→表面上の意味や一般的な考えとは反対のところに真実や真理があること。パラドックス

命題＝めいだい↓「AはBである」のような形式の言明
揶揄＝やゆ↓からかうこと。皮肉を言うこと
潜在＝せんざい↓外にあらわれず、内部に目立たずにあること。対義語「顕在（けんざい）」
啓蒙＝けいもう↓無知無学な人たちに知識を与えること。「蒙」には「愚か」「暗闇」という意味があり、そこに知恵の光を照らすのが「啓蒙」で、英語ではenlightenment
慈善＝じぜん↓困っているひとを金銭的物質的に支援すること。チャリティ。類義語「篤志（とくし）」
真相＝しんそう↓一般には明らかにされていない本当のこと。同音異義語「深層」
迷妄＝めいもう↓道理を知らないがゆえの間違いや心の迷い
レトリック＝表現法・修辞法。「人をだますような巧妙な言い回し」という悪い意味もあり、本文はこれ。この悪い意味の類義語「詭弁（きべん）」
偶像＝ぐうぞう↓仏像やマリア像のような具体的な崇拝対象。「中身や実体がないのにあがめられているもの」という意味もあり、本文はこれ
旗印＝はたじるし↓「風林火山」のような、戦の時に武士たちが掲げたもの。紋所（もんどころ）。類義語「錦（にしき）の御旗（みはた）」↓もとは「官軍の旗」の意味だが、広くは「誰も反対できないような標語」として使われる
決別＝けつべつ↓きっぱり分かれること。入試では常用外の「訣別（けつべつ）」も出る
ドグマ↓本来は宗教上の大事な教義の意味だが、決めつけや独断や凝り固まった考えという意味で使われることが多い
心身二元論＝しんしんにげんろん↓心と身体は別の実体との考え方。とくにフランスの哲学者、ルネ・デカルトは心身を分けた上で心を重視した
透徹＝とうてつ↓筋がとおっていて曖昧なところがいっさいないこと
無知蒙昧＝むちもうまい↓知識がまるっきりないこと
呵責＝かしゃく↓強く責任を感じて苦しむこと

認識論＝にんしきろん→人間がものごとを理解する仕方を明らかにしようとする哲学。人間の存在のあり方を明らかにしようとする哲学が「存在論」

復習問題　第二講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）学業に真ケンに取り組む　①験　②険　③検　④剣　⑤賢

（イ）物理的なショウ撃を受ける　①衝　②焦　③憧　④症　⑤翔

（ウ）社会奉仕やジ善活動に励む　①事　②次　③治　④磁　⑤慈

（エ）新入生を部活にカン誘する　①監　②勧　③環　④閑　⑤管

（オ）事件の容疑者をコク発する　①酷　②国　③穀　④刻　⑤告

（カ）隠れた真ソウを調査する　①相　②装　③層　④荘　⑤操

（キ）家庭の内情を暴ロする　①炉　②路　③露　④賂　⑤呂

（ク）そう一ガイには言えない　①該　②慨　③害　④概　⑤外

（ケ）貧困から脱キャクする　①脚　②客　③却　④隔　⑤格

（コ）対象へのドウ察が鋭い　①道　②洞　③胴　④導　⑤銅

第三講　論説　記述編　哲学・心理・コミュニケーション論

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

直接かかわらないで、ただじっと見ている、あるいは何もしないでただ横にいるということが、ポジティヴな力になることがある。はじめての幼稚園。母親にじっと見守られている、関心をもたれていることで、はじめてひとりで新しい仲間の輪のなかに入ってゆけたという思い出はだれにもあるだろう。見守るとともに、聴くということにも、何もしないことが他人を深く支える、そういう力がある。じっさい、ひとは自分の落ち込んだ気持ちを、ひとに聴いてもらえると楽になる。他人に話したら、理解してもらえなくても、聴いてもらうだけでずいぶん楽になれる。

だれかにほんとうに聴いてもらいたくなるのは、ふさいでいるとき、でも自分でも何を訴えたいのかよくわからないときである。しかし聴くというのはなかなかにむずかしいことである。何か思いつめているときには、まず「言ったってわかるはずがない」と口が重くなるが、「ふん、ふん」とうなずかれると、「そんなにかんたんにわかられてたまるか」という反発が先に立つ。それが感染して、聴くほうも「わかるんだけどわかりたくない」と意固地にもなる。聴こうとするといやがるから、逆に鼻歌うたいながら用事でもしつつ聴くとはなしに聴く、くらいの感じではじめて口を開いてもらえるということもある。

しかし、聴くことがもっとむずかしいのは、聴いても言葉を返しようがないとあらかじめわかっているときである。重篤な病気になった友人、家族を失った被災者、子どもを失った両親、ホスピス(注)の患者さん、くり返し病に冒される知人……。このひとたちの前に立ったとき、とっさにどう声をかけていいのかわからず、怯(ひる)んでしまう。まさに聴くことしかできないのである。けれども、A ひたすら聴くということ、そのことには大きな意味がこもっている。

このような場合にじっと聴くのがむずかしいのには、いくつか理由がある。一つは、苦しみやふさぎの理由を問うても答えがないことは、話す本人がわかっているから。なぜこのわたしばかりが病に冒されるのか、こんな状態でも生きつづけることは死ぬことより大事なのか……と問いただしても、だれも答えを返せないに決まっている。

第二に、ひとはほんとうに苦しいときには話さないものである。「言ったってわかってもらえるはずがない」。それでもようや

っと口を開いても、一言一言が相手にたしかに届いているか確認しながらしか話せないので、どうしてもとつとつとした断片的な語りになってしまう。

第三に、迎え入れられるという確信のないところでは、ひとは他人に言葉をあずけないものだ。ほんとうはそのことは考えたくない、忘れていたいのに、B他人に語ることで苦しみをわざわざ二重にすることはない。

そして最後に、とくに家族の場合、自分が漏らす一言一言を身内は聞き流すことができず、それらに過剰に反応してしまう。「そんなこと思っていたのか。こっちの身にもなってくれ」と返され、そして「言わなきゃよかった」と二度と口を開かなくなる。

聴くというのは、それほどにむずかしいことである。が、それでもひたすら聴かねばならない。最後まで聴き切らねばならない。聴くだけ、言葉を受けとめるだけということが意味をもつのは、いったいどうしてか。

苦しみやふさぎのなかに溺れてしまっているひとが、それでもそれについて語るためには自分の苦しみやふさぎについて、どんなきっかけ、どんな経過でこんな苦しみやふさぎに襲われることになったのか、その理由と考えられるものは何か、いまはどんな状態か、というふうに、苦しみやふさぎから身を引き剥(は)がし、ことがらを時系列に並べ換え、整理して語らねばならない。このように自分の苦しみやふさぎにある距離をとり、それを対象化するなかで、それらとの関係が変わるということがここではとりわけ重要なのである。つまり、苦しみやふさぎを当初あったのとは別の地平へと移し変えるところに、他者を前におのれについて語ることの意味はある。語るということは、相手に回答をもらうということではない。C見えない自分の姿を映すために、その鏡の役を相手にしてもらうことであるのだ。

が、鏡であるべき聴く者は、話の中身が重いし、しかも相手からなかなか言葉が漏れてこないので、その緊迫になかなか耐えきれない。身を固くしてじりじりと待つだけで疲れはててしまう。そのうち待ちきれなくなって、「あなたが言いたいのはこういうことじゃないの?」と誘い水を向ける。話すほうはその明快な語り口につい乗ってしまう。「わかってもらえた」、と。が、Dこれはじつはもっともまずい聴き方なのだ。

(鷲田清一『わかりやすいはわかりにくい?――臨床哲学講座』筑摩書房、二〇一〇年、一二〇~一二四頁より)

(注)ホスピス……死期の近い患者に延命治療を行わずに、肉体の苦痛を和らげ、精神面の援助により生を全うできるよ

う医療を行う施設のこと。

問１　本文では「聞く」ではなく「聴く」という表記が用いられているが、この両者の辞書的な意味の違いを述べなさい。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問２　傍線部Ａ「ひたすら聴くということ、そのことには大きな意味がこもっている」とあるが、この「意味」は話し手にどのような作用をもたらすことを指すか。本文の言葉を用いてまとめなさい。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問３　傍線部Ｂ「他人に語ることで苦しみをわざわざ二重にすること」とはどういうことか。本文の内容に即して述べなさい。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問４　傍線部Ｃ「見えない自分の姿を映すために、その鏡の役を相手にしてもらうこと」とは具体的にどういう意味か。分かりやすく説明しなさい。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

問５　傍線部Ｄ「これはじつはもっともまずい聴き方なのだ」とあるが、それはなぜか。本文全体の内容をふまえて述べなさい。（サプリ講義担当者からの注―二行、七〇字程度書ける解答欄があります。この中で必要と考えられる説明をしてください）

知識モノ解説

文学史・人物紹介

●鷲田清一＝わしだ　きよかず（一九四九〜）京都生まれ、京都大学文学部哲学科専攻、同大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。関西大学教授、大阪大学総長、京都市立芸術大学長などを務め、現在はせんだいメディアテーク館長。著書多数で、概ね二十一世紀以降の現代文や小論文入試にてもっともよく出題される人。センター試験でも登場済み

語句

臨床＝りんしょう↓ベッドサイド・現場
ふさぐ＝塞ぐ↓何か心に引っかかることがあって憂鬱（ゆううつ）になること
思いつめる＝思い悩むこと、これしかないと思考が縛られること、思考が煮詰まること
意固地＝いこじ↓頑固（がんこ）になって、自分の意見を譲らないこと。「依怙地」という表記もある
鼻歌うたう＝はなうたうたう↓気分の良い様子。真剣みが感じられない様子という意味もある
重篤＝じゅうとく↓重い病気で容易には治らない様子
冒される＝おかされる　病などにおそわれること。「冒す」は、あえて何かをするという意味で「危険を冒す」などと使う。同音異義語の「犯す」は「過ちを犯す・法を犯す」などと使う。「侵す」は「権利を侵す・領土を侵す」などと使う
怯む＝ひるむ↓勢いにおされて、気力がくじけること
対象化＝たいしょうか↓自分とは距離を置いて冷静に見ること。客観化。モノ扱いするという意味もある

地平＝ちへい→次元やステージ

誘い水＝さそいみず→しむけること、誘導すること。「呼び水」とも言う

復習問題　第三講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）来年は幼チ園の先生になる　①致　②稚　③治　④乳　⑤池
（イ）効果的な感セン症対策を練る　①選　②宣　③戦　④染　⑤腺
（ウ）意固ジな性格と指摘される　①自　②慈　③地　④示　⑤児
（エ）病気の重トク化を予防する　①徳　②得　③特　④匿　⑤篤
（オ）知識を断ペン化せず統合する　①編　②偏　③片　④辺　⑤返
（カ）合格するとのカク信がある　①核　②覚　③格　④確　⑤閣
（キ）反応の仕方が過ジョウだ　①剰　②醸　③乗　④状　⑤常
（ク）時ケイ列にそって整理する　①経　②系　③計　④形　⑤携
（ケ）現地のヒ災状況を報告する　①被　②非　③彼　④秘　⑤碑
（コ）事態がキン迫の度を増す　①禁　②襟　③筋　④僅　⑤緊

第四講　論説　芸術編

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

自然民族、あるいはそれに近い、つまり[ア]「近代化」の影響をあまり濃厚に受けていないような共同体では、シャーマンが社会の中で重要な働きをしている。シャーマンの役割は、言うまでもなく、呪術的な社会に特徴的と言われるもので、超自然的な霊との交流の中で、予言、占い、あるいは病気の治療、加持などを行うことにある。そうした役割を果たす場合に、シャーマンである人間は、通常の意識状態とは違った、トランスの状態になれることが大切な特徴で、交流する霊が直接シャーマンに憑（ひょう）依（い）するにせよ、あるいはそうした超自然的な存在の間接的な翻訳者になるにせよ、シャーマンが異常な意識状態にあること、あるいはなり得ることが、客観的にその役割の可能性を社会的に保証することになるのである。

言い換えれば、通常の人間には達し得ないような異常な精神状態を、自らに実現できる能力を供えた人間が、シャーマンということになる。そうしたトランスの状態を、どのように導くか、今では薬物が可能な手段として知られているが、一方では、トランスの状態にある人間の脳内にはある種の物質が存在していることも確かめられてはいるが、音楽、ある種の言葉の執拗（しつよう）な反復、踊りなどの身体的な動作などが、実際にトランスを導く（つまりある種の物質の脳内への分泌を促す）のであって、それは、尋常で日常的な秩序からのはみ出し、あるいは「逸脱」と呼んだものに相当する。

したがって、容易にそうした異常な状態に陥ることができる人間というのは、日常的な秩序の立場からすれば、「アウトサイダー」として分類される人々である。今日の近代社会では「精神病者」あるいは「精神病質者」と見なされることの多い人々ということができる。[A]呪術社会では、そうした「(注)アリエネ」に相当する人々に、「病気」のレッテルを貼って、病院に閉じ込めたり、あるいは保護観察的な処置をしたりするのではなく、シャーマンという社会の中でもある場合には極めて重要となる役割を割り振ることによって、そういう人々を共同体の秩序の中に取り込むという手段を講じている、と考えることができる。

このような事実は、ある共同体が、日常的に安定しているという意味での「安全」を考慮する場合でも、「アウトサイダー」や「逸脱分子」を、排除したり、圧殺したりすることなく、共同体の内部に彼らの存在する場所を造ることによって、彼らのエネルギーを吸収するという方法をとることがある、ということを教えてくれる。

しかも注意すべきは、シャーマンが活躍すべき機会というのは、共同体の成員の病気、あるいは不幸、あるいは敵の襲撃など共同体にとっての厄介事が眼前にあり、多少とも、共同体の日常的な安定が脅（おびや）かされているときであるという点である。

このような目で問題を眺めて見ると、近代社会でも同じような役割がいくつかあることに気づかされる。例えば芸術家と言われる人々がそうである。「芸術」という概念は、実はヨーロッパにおいて、近代化が進んで初めて誕生したものではなかったであろうか。一八世紀までは、今日では「芸術」のジャンルに分類されている仕事は、すべて「職人」の仕事であった。詩人だけは別だったかもしれないが、それでも詩の創作には、身につけるべき基本的な技術（「グラドゥス・アド・パルナッスム」と呼ばれる）があって、ちょうど職人が修行によって、技術的成熟を目指すように、習練を積まなければならなかった。絵画、彫刻、あるいは音楽などは、全く「職人」の世界であって、美学的な理念を追求する、社会から隔絶した特殊な人種としての「芸術家」などという存在はなく、また、そうした人種が美を追求する営みとしての「芸術」というものもなかった、と私は考えている。

逆に言えば一八世紀末から一九世紀初頭にかけて、イ近代社会の成熟と符節を合わせて、世界の歴史の中で初めて「芸術」というジャンルが誕生したのである。

ところで、近代社会のなかで「芸術家」と言われる人々は、一体どのように考えられているだろうか。多くの場合、彼らは先ず社会の「はみ出しもの」である。一風変わったなりをし、世の中の常識から逸脱し、あるいは常識を敵視している。「健康」で「健全」で「清潔」で「安全」で「何の危険もない」と思われるような「芸術」に、芸術としての魅力はない。かつての文士の間では、このテーゼを逆にして、「はみ出しもの」を装えば、それで「芸術家」であることの証明になると考えられていた節がある。むろん逆は成り立たない。つまり［Ⅰ］は総じて［Ⅱ］であるにしても、［Ⅲ］が総じて［Ⅳ］になるわけではない。

ところで、単に外見や生活態度ではなく、芸術活動そのものにおいて、社会の規範から「はみ出す」という場合に、もっとも典型的には、文学、絵画、彫刻、写真、映画などにおける「猥褻（わいせつ）性」の問題がある。かつてD・H・ローレンスの『チャタレー夫人の恋人』の邦訳を巡る裁判では、新聞紙上にしばしば「芸術か猥褻か」という惹句（じゃっく）が見出しに(1)躍った。つまり、この事

実は、「芸術」と「猥褻」とは対立事象と解釈され、「芸術」ならばよく、「芸術」でなければ社会規範に反するもの、つまり猥褻である、という考え方が、しごく当然のこととして、受け入れられていたことを物語っている。

「猥褻」ばかりではない。社会の日常的秩序感覚から見れば、明らかに外れているようなものでも、例えば便器の壊れたものを展覧会場に並べて作品とすることも、あるいは使い古したテレヴィジョン・セットを多数森の中に配して、「芸術作品」とするのも、あるいは、舞台の上に蓋を開けたピアノを置き、袖から燕尾服に身を固めたピアニストが登場して、ピアノの前の椅子に腰掛けて、ただ何分間か、そこに黙って座らせておくだけで「芸術作品」と主張するのも、いずれも、「芸術」の名において行われるからこそ、そして、社会も一応そうであることを了解しているからこそ、それなりに許されるのであって、もし、そうした行為が、芸術という名を冠せられていなかったとしたら、明らかに当事者は、精神に異常のあるものとして扱われるはずである。言い換えれば、何かが「芸術」である限りは、当該の社会が日常的に認めている規範の許す範囲を相当程度逸脱しても、それは容認されるという前提了解が、近代社会では出来上がっていることになる。

話は変わるようだが、精神医学の一部に「病跡学」（パトグラフィ）と名付けられた領域がある。通常は、天才的な創造者に関して、その創造行為と、その人物の精神における病的状態との間の相互関係の有無や、その程度を、作品そのものと、伝えられる日常的生活との分析を通じて、明らかにしようとする学問である。天才的創造者が、多かれ少なかれ、常人の「健康さ」からは距離のある存在である、という印象、［ B ］「天才と狂人とは紙一重」という俗言を、精神分析によって確認しようとする、と言い換えたら、病跡学の専門家は憤慨なされるだろうか。しかし、病跡学という名前からして、もともと対象が「病気」であることを前提にしたものである以上、天才的創造者と呼ばれる人々の間に、通常の人々の間でよりははるかに高い頻度で「アリエネ」が見られることも、当然の前提になるだろう。

天才的創造活動をしていることが「狂気」を誘発するのか、「狂気」が天才的創造活動を生むのか、いずれにせよ、両者の相関関係は濃厚であると見なければならない。そして、そうした社会の日常的秩序から逸脱する傾向を備えた「アリエネ」たちを、共同体から排除するのではなく、社会の秩序の内部に繋ぎ止めておくための、一つの有効な手段がまさしく、「芸術」というジャンルを造り、そこにそうした人々の仕事をカテゴライズすることであったのではないだろうか。

ちょうど呪術社会が、「アリエネ」に当たる人々のエネルギーを、共同体から排除してしまうのではなく、シャーマンという

形で共同体内部に吸収するという手段をとっているのと、全く同じことが、近代社会における「芸術」であると言えるように思われる。

さて、上に、近代社会において「芸術」が確立され、それが、社会規範からの逸脱のエネルギーを、個人的にも社会的にも、共同体内部に吸収する役割を果たしている、という仮説を考えてみた。それは、芸術家と呼ばれている人々の個人的なエネルギーを、社会の内部に吸収するだけではない。一般の人々のなかに潜在的にくすぶっている、規範への反抗や否定や逸脱のエネルギーをも、芸術家の活動が、代替機能のように引き受けることによって、芸術は、そうした社会のなかの一般のエネルギーをも共同体内部で吸収する、という二重の役目を果たしているように思われる。俗な表現を使えば、一般の人々がしたくてもできないような規範破りを芸術家が代わってやってくれることによって、代償的な効果が生まれることにもなる。

その意味では、芸術ないし芸術家は、近代社会が安定した形で維持されるための社会的安全装置の一つと考えることができる。

しかし、問題はその先にある。というのも、このような状況下には、守ることを前提とされている社会の既存の規範は、全く無傷でいるというわけにはいかないからである。というのも、芸術家の提示するものは、それなりに既存の社会規範や、共同体が自明のものとして守ってきた価値基準などへの抵抗、批判、抗議、拒否を示すものであり、如何にそれが「芸術」の名の下に提出されていようと、そして社会がただ「芸術」の名の下でのみそれを容認しているに過ぎなかろうと、それは依然として、既存の規範に対する「ノー」の宣言にほかならない。したがって、それが共同体のなかで(2)名目的にせよ容認されることは、共有されている規範や価値が、絶対のものでないことを容認することでもある。したがって、そこからは、社会全体の規範が動くことをも、容認せざるを得ないという結果が生じる。

もちろん、芸術などという安全装置によらないような社会でも、共有されている規範は絶対的に動かずに存在し、長い時間にわたって成員を支配し続ける、というようなことにはならないのが普通である。他の文化との接触、あるいは自己自身の中に内蔵された逸脱のエネルギーの、別の形での評価などの要素が働けば、当然のこととして、規範や価値は動かざるを得ない。

しかし「芸術」という「安全」装置の場合には、本来的に、「安全」であるのは社会ないしは共同体全体であって、それが成り立つ基盤としての、共有される価値体系などは、その意味では「安全」ではあり得ないことになる。

[C]、このような安全装置に頼るとすれば、社会の「安全」という概念は、決して、既存の社会規範、既存の社会構造が、

時間の経過にもかかわらず、無傷で経過する、ということにはならないことを認めなければならなくなる。

ここでわたしたちは、社会の安全ということに関して、少なくとも二つのものを区別しなければならないことを学んだことになる。

その一つは、文字どおり、ある社会が変化を被らずに、そのまま維持される、という状況である。第二は、社会の内部や構造、あるいはそれを支える原理的な規範などは、少なくともある程度の変化はしつつも、社会全体としては、それなりに、危機的事態を回避して、時間の経過のなかで維持されていく、という状況である。

D 前者を「静的な安全」、後者を「動的な安全」と呼ぶとすれば、社会の安全には、この二つの種類の概念があって、どちらを目指すかによって、その目的を達成するための、処方箋(しょほうせん)も、あるいはそこでとられる手段も、変わらざるを得ないのである。

――村上陽一郎『安全学』――

(注)

アリエネ……フランス語で「疎外された者」「精神病者」のこと。

問1　空欄A・B・C・Dにあてはまる最も適切な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A

1　つまりは　2　仮に　3　それゆえ　4　しかし

5　あるいは

B

1　それゆえ　2　つまりは　3　ところで　4　仮に

5　しかも

C

1　したがって　2　ところが　3　逆に　4　ところで
5　ちょうど

D

1　ところが　2　ある意味で　3　少なくとも　4　一方で
5　仮に

問2　空欄Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳに入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

1　Ⅰ「職人」　Ⅱ「芸術家」　Ⅲ「芸術家」
Ⅳ「職人」
2　Ⅰ「芸術家」　Ⅱ「職人」　Ⅲ「職人」
Ⅳ「芸術家」
3　Ⅰ「芸術家」　Ⅱ「芸術家」　Ⅲ「はみ出しもの」
Ⅳ「はみ出しもの」
4　Ⅰ「はみ出しもの」　Ⅱ「芸術家」　Ⅲ「芸術家」
Ⅳ「はみ出しもの」
5　Ⅰ「芸術家」　Ⅱ「はみ出しもの」　Ⅲ「はみ出しもの」
Ⅳ「芸術家」

問3　傍線部（1）「躍った」、（2）「名目的に」の言葉は問題文中ではどのような意味で用いられているか。最も適切なものを、それぞれ一つずつ選べ。

（1）躍った

1　バラバラに乱れていた　　2　たくさん見受けられた
3　激しく揺れ動いていた　　4　うれしそうに取り上げられた
5　リズミカルに動いていた

（2）名目的に

1　客観的に　　2　芸術的に　　3　実体的に　　4　社会的に
5　表面的に

問4　波線部ア「「近代化」の影響をあまり濃厚に受けていないような共同体では、シャーマンが社会の中で重要な働きをしている」とあるが、筆者はそうした共同体の中でのシャーマンの働きを通してどのようなことがわかると考えているか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

1　呪術的社会では、病気の治療や加持を行うシャーマンは通常の人間では不可能な異様な精神状態を作り出せる「アウトサイダー」として排除されていることがわかる。
2　呪術的社会では、超自然的な霊と交流できる能力を持つシャーマンは排除されることなく、活躍する場を与えられることで共同体の秩序の中に取り込まれていることがわかる。
3　通常の人間では達し得ない異様なトランス状態を自ら実現できる能力を持つシャーマンは、近代社会では一種の「精神病者」として病院に閉じこめなければならないことがわかる。
4　疫病がはやる、外敵に攻められるなど、共同体の危機に活躍すべき機会が与えられることで、シャーマンは特殊な能

力を持った「アリエネ」であることを証明しようとしているのだということがわかる。

5　超自然的な霊が憑依したり、それらとの間接的な翻訳者になったりするシャーマンが活躍していることから、その共同体が一八世紀以前の古い共同体であることがわかる。

問5　波線部イ「近代社会の成熟と符節を合わせて、世界の歴史の中で初めて「芸術」というジャンルが誕生した」とあるが、筆者は本文中で「芸術」「芸術家」をどのようなものと考えているか。最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

1　芸術というジャンルは美を追求する、社会から切り離された営みであり、芸術家とは常識から逸脱し、あるいはそれを敵視する存在である。

2　芸術というジャンルは健康で健全で清潔で安全なものではなく、芸術家とはその中にあって職人的で、社会常識を持った特殊な人種である。

3　芸術というジャンルは近代社会では職人的な専門技術の世界であり、芸術家とは技術的成熟を目指す特殊な人種である。

4　芸術というジャンルは文学や絵画、彫刻、音楽などの美を追求する分野であるが、芸術家とは必ずしも「はみ出しもの」とはかぎらない。

5　芸術というジャンルは一八世紀までは職人の仕事とは異なった特殊な世界であり、芸術家とは常識から逸脱した「はみ出しもの」である。

問6　問題文の内容と合致するものを、次の中から**二つ**選べ。

1　社会の安全には、既存の社会が変化せずに維持される「静的な安全」と、ある程度の変化を容認しつつ全体として時間をかけて維持されていく「動的な安全」の二つがある。

2　社会の安全には「静的な安全」と「動的な安全」の二つがあるが、どちらを目指すにしても、近代社会にとって不可欠な「安全」を揺るぎないものにするという目的を達成するためにとるべき手段に違いはない。

3　超自然的な霊と交流できるシャーマンや社会常識から逸脱する芸術家は、社会の「安全」を揺るがす存在として「アウトサイダー」「精神病者」などのレッテルを貼って排除しなければならない。

4「芸術」とは近代社会の成熟とともに生まれたジャンルであり、「芸術」の名を冠していればどのような猥褻な表現でも容認されうるという前提が近代社会では了解されている。

5　病跡学という学問は、天才的創造活動と「狂気」の相関関係を明らかにすることで、共同体から逸脱する天才的創造者を社会秩序の内部に繋ぎとめようとする精神医学の一種である。

6「芸術」というジャンルは、芸術家の個人的なエネルギーを社会内部に吸収するだけではなく、人々の内部にある反抗や否定のエネルギーを抑圧する装置として二重の役目を果たしている。

7　日常的な社会の安定を維持するという意味では、呪術的な社会のシャーマンや近代社会の芸術家という存在は、人々に潜在する逸脱のエネルギーを吸収する一種の社会的な安全装置である。

8「芸術」という安全装置に頼る近代社会では、「安全」に保たれるのは共有される価値体系や社会規範であって、社会構造全体の「安全」は保たれるわけではない。

知識モノ解説

文学史・人物紹介

●村上陽一郎＝むらかみ　よういちろう（一九三六〜）東京生まれ、東京大学教養学部で科学史科学哲学を専攻、同大学院人文科学研究科単位取得満期退学。この分野における日本のトップランナーで入試現代文でも出題されつづけている碩学。上智大教授、東大教授、ＩＣＵ教授、東洋英和女学院大学学長などを歴任。

●Ｄ・Ｈ・ロレンス＝デービット・ハーバート・リチャーズ・ロレンス（一八八五〜一九三〇）イギリスの小説家。『チャタレイ夫人の恋人』は伊藤整によって日本語訳が出版されたが、「猥褻」ということで裁判になった（一九五一年から）。同様の事例には、澁澤龍彦（しぶさわたつひこ）が翻訳したマルキ・ド・サドの『悪徳の栄え―新ジュスティーヌ物語』がある

●マルセル・デュシャン（一八八七〜一九六八）フランス出身で、後アメリカ国籍を取得した前衛的アーティスト。工業製品の男性用小便器を『泉』としてニューヨークでの展覧会で展示して話題となった。

●ジョン・ケージ（一九一二〜一九九二）前衛的、実験的で知られるアメリカの作曲家。ピアニストがピアノを前にしながら演奏しない『四分三十三秒』という「作品」もある。また自身の思想については『小鳥たちのために』（青土社）に詳しい。「ケージ」には柵、鳥かごの意味もある

語句

シャーマン→呪術師

呪術＝じゅじゅつ→神仏や霊などと交信する術。またそのような文化をシャーマニズムという

超自然＝ちょうしぜん→科学的に説明できるような自然現象を超越していること。オカルト

加持＝かじ↓災いが起きないように神仏に祈ること。加持祈祷（かじきとう）ともいう
トランス↓意識が飛んだような忘我状態
憑依＝ひょうい↓何かの霊や魂が人間にのりうつること
保証＝ほしょう↓間違いないと請け合うこと。同音異義語「保障」は権利や生活や安全を守ること。「補償」
　は損害の埋め合わせをすること
執拗＝しつよう↓しつこいこと
分泌＝ぶんぴつ↓液状の物質をにじみ出すこと。「ぶんぴ」という読み方もある
尋常＝じんじょう↓まともで普通なこと
アウトサイダー↓仲間ではない人。部外者・局外者。反義語は「インサイダー」
逸脱＝いつだつ↓本筋（ほんすじ）や決まった範囲から外れること
厄介事＝やっかいごと↓できれば避けたい面倒な事態
概念＝がいねん↓抽象的な言葉。考え方
符節＝ふせつ↓印をつけた板を二つに割って別々にもち、仲間かどうか確認できるようにしたもの。割符（わりふ）・割
　札（わりふだ）ともいう
文士＝ぶんし↓小説などを書くことを職業とする人。文筆業
テーゼ↓ドイツ語で、意見・提言・命題などの意味
猥褻＝わいせつ↓性的にみだらで道徳に反すること
惹句＝じゃっく↓人々の注目を集めるためのことば。キャッチフレーズ
規範＝きはん↓社会で求められる行動の型。ルールや規律
俗言＝ぞくげん↓世間のうわさのようなもの。「俗にいう〜」という表現で語られるもの
憤慨＝ふんがい↓不当なことに怒りを感じること
カテゴライズ↓分類すること。カテゴリー↓分類項目・範疇（はんちゅう）・枠組み

代替＝だいたい・だいかえ→他のもので置き換えること
代償＝だいしょう→引き換え。埋め合わせ
自明＝じめい→当たり前なこと。いまさら説明するまでもなくおのずから明らかなもの
処方箋＝しょほうせん→本来は医師が薬などの処方を記した文書。転じてものごとの解決方法のこと

復習問題　第四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

(ア) 重要箇所を反プク練習する　①複　②副　③復　④覆　⑤福

(イ) 胃液が適度に分ピツされる　①筆　②必　③逼　④櫃　⑤泌

(ウ) 患部にショ置がなされる　①所　②署　③諸　④処　⑤緒

(エ) 背後からシュウ撃される　①襲　②蹴　③酬　④執　⑤醜

(オ) 人里からカク絶した土地　①核　②閣　③郭　④隔　⑤拡

(カ) 当ガイの社会について語る　①外　②涯　③概　④凱　⑤該

(キ) 疎外されてフン慨する　①噴　②憤　③紛　④粉　⑤墳

(ク) 出題されるヒン度が高い　①品　②貧　③頻　④賓　⑤瀕

(ケ) 敗戦の空気が濃コウになる　①興　②厚　③候　④広　⑤高

(コ) 次善の代タイ案を考える　①替　②耐　③待　④退　⑤対

第五講　論説　政治編

次の問題文を読み、後の問いに答えなさい。

権力がそれ自身の魅力を持つことは、政治的統合への関与という目的と権力という手段との関係が更に一層錯綜（さくそう）したものになる可能性を示唆している。それだけに政治家には政治活動の実態に対する距離感が期待されることになる（単なる「権力亡者」からの距離感の醸成）。まず、政治家は集団全体の事柄に配慮すべき存在であること^アから、「自分のこと」への配慮^イからは距離をとることが期待されてきた。「自分のこと」にしか興味のない人間は政治家にはならないだろうし、なってもらっては困るということである。「自分のこと」にしか興味がないならば、ひたすらそれに専念するのが当然であり、①そういう人間が権力の追求を始めればその結末は不幸なことになる。精々、権力の私的な、ケチな濫用に終わるのがオチだからである。

アリストテレスは名誉に関する徳として、メガロプシュキア（魂の大いなること、高大なること）をあげている。翻訳では矜持（きょうじ）と訳されている。②矜持ある人とは、「外的な善」の中で最高のものである大いなる栄光や名誉に^ウ自ら与る（あずかる）のに値するということを^エ自らの価値に依拠して自任している人である。彼は「大きいもの」に値する人間でなければならず、当然、よき卓越した人間であること、「うるわしくよきひとたること」を前提にしている。

富や政治的影響力といったものは矜持に寄与するものであるが、そうした幸運な諸条件だけに根拠を持つ優越性だけでは矜持ある人間ではあり得ない。こうした外的な条件を^A笠に着て優越していると考えるのは傲慢（ごうまん）であり、驕奢（きょうしゃ）であるに過ぎない。真に矜持のある人は、幸運な諸条件が変わってもむやみに喜ばず、むやみに苦しむことはない。何よりも矜持のある人は、大きなことのために危険を冒すことを恐れず、生命を惜しまない人である。他人に何物をも求めずに、自ら進んで人々の役に立ち、権勢を持つ者には尊大に振舞い、弱者には控え目に対し、他人の目を気にすることなく率直に語り行動する。瑣末（さまつ）なこと、個人的なことに専ら関心を奪われたりするのは「大きなこと」に値することを考える矜持の人にはふさわしくない態度である。そして何事をも大きいと考えることなく、静かに落ち着いて、興奮することなく行動するのが、矜持ある人間にふさわしいという。

アリストテレスは矜持と並んで豪華（メガロペイペイア）についても言及している。これは壮大な出費を公共のために、うるわしく、ふさわしい形で行うことによって、人々の尊敬を集める資質である。豪華な人は自らの資力にふさわしい形で、自分自身のためにではなく、公共的なもろもろの事柄のために費やす。それと対比されるのが「こまかさ」である。

ここに描かれた矜持ある人間の姿は、「自分のこと」から可能な限り距離をおいて、「大きなこと」への強烈なコミットメントによって――危険を恐れず、生命を惜しむことなく――大きな名誉という最高の外的な善を指針として生きる人である。「自分のこと」と「大きなこと」とは対照的であり、前者はやがて忘却の対象にしかならないのに対して、後者は社会の記憶として残り続けるという意味で、ある種の永続性――俗に、「　　」――ことにつながる。政治活動が権力をめぐる競争であるとともに名誉をめぐる競争であることからも、この③矜持ある人間が政治家の姿と重なっていることは明らかである。

勿論（もちろん）、政治の世界は徒（いたずら）に名誉や権力を求める人間たちが殺到するアリーナ（舞台）でもあるとすれば、真に矜持ある人間なのか、それとも富や権勢をひたすら誇っているだけの人間なのかの区別は容易ではない。後者は「大きなこと」への関心をB売り物にして実は「自分のこと」に専ら関心を向けているに過ぎない。そこでアリストテレスは「うるわしくよきひとたること」というギリシア人の理想の条件を付し、この区別の可能性を根拠づけている。《中略》

有名なプラトンの哲人王論には、政治家の姿を探る興味深いヒントが見られる。ここでは哲学者にふさわしい資質と政治家の資質はいわば重ね合わせの関係にある。哲人王は真の実在（イデアの世界）を確実に認識しているのみならず、経験においてもその徳性においても他の人間にひけをとらない人間のことである。そこで哲学者の自然的資質がチェックされる。まず、虚偽を受け入れないことが真理への熱情との関係で重要な資質となる。肉体的な欲望に関しては節度のある人間であること、金銭を追い求めたりすることがないことが資質として重要である。

注目すべきは、「狭量な精神」は致命的な欠陥とされている点である。「万有の全体を常に憧（あこが）れ求める」こと、従ってこの「気宇壮大な精神、全時間と全存在を観想する精神」にとって「狭量な精神」ほど、矛盾するものはない。総じて、この世の事柄に関心を奪われたり、臆病であったりしてはならない。知的には、記憶力がよく、理解力があることが必要とされる。かくして哲学を十分に適（かな）う資質としては、「記憶がよく、ものわかりがよく、度量が大きく、優雅で、真理と正義と勇気と節制を愛する」人間である必要がある。こうした資質を備えた人間は数が限られているが、優れた資質を持った人間も現実にはその悪い環境の

ためにしばしば堕落させられている。すなわち、知性を欠いたまま、ひたすら野心の虜(とりこ)となり、ポリスに深刻な害悪をもたらすような存在になってしまう、と。
　ここにはこれまでの議論にも見られた節度をはじめとする徳性の他に、哲学に通ずる知的能力が必要不可欠な資質として付け加えられている。

（佐々木毅『政治の精神』）

〔注〕
○コミットメント――関与すること。　○ポリス――古代ギリシアの都市国家。

問1　空白部に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。
　1　歴史に名を残す　　2　歴史は繰り返す　　3　歴史を作る
　4　歴史の証人となる

問2　＝＝線部ア・イの「から」に関する説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。
　1　アは原因・理由の格助詞、イは起点・原点の格助詞。
　2　アもイも起点・原点の格助詞。
　3　アは起点・原点の接続助詞、イは原因・理由の格助詞。
　4　アもイも原因・理由の接続助詞。

問３　＝＝線部ウ・エの「自ら」に関する説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　ウ・エともに「おのずから」と読む名詞である。
２　ウは「みずから」と読む副詞、エは「みずから」と読む名詞である。
３　ウは「おのずから」と読む名詞、エは「みずから」と読む副詞である。
４　ウ・エともに「みずから」と読む名詞である。

問４　〰〰線部Ａ「笠に着て」、Ｂ「売り物」の文中での意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

Ａ

１　有力な後ろ盾をあてにして大きな態度をとること。
２　人からの羨望（せんぼう）を一身に集めて悦に入ること。
３　借り物をまるで自分の物のように見せかけること。
４　大袈裟（おおげさ）に飾り立てて実際以上に見せようとすること。

Ｂ

１　実現可能なマニフェスト。
２　最も人目を引く得意なもの。
３　自らのアピールポイントへの評価。
４　難点はあるが人々から気に入られるもの。

問5　――線部①とあるが、「その結末」に該当するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

1　富や政治的影響力による優越性に関心が奪われること。
2　自らの財産を公共のために投げ出すのをよしとしなくなること。
3　政治の世界に名誉や権力を求める人間たちが殺到すること。
4　野心の虜となって国家に深刻な害悪をもたらすこと。

問6　――線部②に関して、アリストテレスが考えていた真に「矜持ある人」として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

1　いかなる危険も恐れずに生命も惜しまないで事に当たり、人々から称賛されることを喜びとしている人。
2　壮大な出費が可能なほど莫大（ばくだい）な財産を所有し、それゆえに人々から支持と称賛を受けて本人も自覚している人。
3　自分の生活基盤は確保した上で公共のために財産を有効に使い、人々から大いなる栄光や名誉を与えられた人。
4　権力者には高慢であってもそうでない人には謙虚に接し、人や社会のために自己犠牲をまったく厭（いと）わない人。

知識モノ解説

文学史・人物紹介

●佐々木毅＝ささき　たけし（一九四二〜）秋田県生まれ、東京大学法学部卒。東大法学部教授、東大学長などを歴任。政治学者

●アリストテレス　古代ギリシアの哲学者。著書に『美学』『倫理学』『政治学』『物理学』『形而上学』『詩学』などがあり、万学の創始者と呼ばれる。アレクサンドロス大王の家庭教師を務めたことでも知られる。プラトンの弟子。

●プラトン　古代ギリシアの哲学者。アカデメイアという学校を創始し、アリストテレスもそこで学んだ。師であったソクラテスを主人公にした対話型の哲学書を多数残した。代表作『ソクラテスの弁明』

語句

錯綜＝さくそう→複雑に入り組むこと。絡（から）み合うこと

示唆＝しさ→間接的に示すこと。暗示すること

醸成＝じょうせい→発酵を通じて酒などをつくることがもともとの意味だが、転じて、時間をかけて何かを作りあげるという意味で使われる

濫用＝らんよう→本来の使い方や限度を超えて勝手に使うこと

オチ→笑いをとるオチではなく、本文では予測されるよくない結末という意味

メガロプシュキア→メガやメガロは「大きい」を意味するギリシア語。例「大都市＝メガロポリス」　プシュケー（psyche）はギリシア語で「魂」の意で「心理学＝psychology サイコロジー」の語源

矜持＝きょうじ→誇り・プライド
依拠＝いきょ→よりどころにする・基盤とする
自任＝じにん→ふさわしい能力や資格が自分にはあると考えること
卓越＝たくえつ→普通の人には及びもつかないほど優れていること
寄与＝きよ→大きく役立つこと。貢献すること
傲慢＝ごうまん→思い上がって偉そうにすること
驕奢＝きょうしゃ→自分の財力や能力を過信して、相手を見下すこと。「驕」「奢」はそれぞれ単独で「おごり」とも読む
権勢＝けんせい→支配的な地位や権力
尊大＝そんだい→どうだとばかりに自己を顕示して、相手を見下すこと
些末・瑣末＝さまつ→細かく重要ではないこと
資質＝ししつ→生まれ持っての性質や才能
節度＝せつど→人に迷惑をかけないなど、自分の行動についての良識
狭量＝きょうりょう→度量、人間としての器が狭く小さいこと
気宇壮大＝きうそうだい→心のスケールが大きいこと
観想＝心を集中させること。物事の本質をつかむこと
節制＝せっせい→とくに飲食について自己管理ができていること
野心＝自分が主人に取って代わって天下を取ろうとするなど悪い意味で使われることが多い。一方で大望、チャレンジ精神などとしてよい意味で使われることもある

復習問題　第五講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

(ア) 情報が激しく錯ソウする　① 争　② 綜　③ 走　④ 操　⑤ 燥

(イ) 示サに富んだ著作を残す　① 唆　② 差　③ 詐　④ 査　⑤ 鎖

(ウ) 学びの雰囲気をジョウ成する　① 場　② 譲　③ 醸　④ 嬢　⑤ 状

(エ) 討論の能力がタク越している　① 拓　② 卓　③ 択　④ 託　⑤ 托

(オ) 財政の再建策にキ与する　① 機　② 帰　③ 軌　④ 着　⑤ 寄

(カ) 他人に対してゴウ慢に振舞う　① 傲　② 豪　③ 郷　④ 剛　⑤ 壕

(キ) 大臣としてのシ質が問われる　① 志　② 氏　③ 資　④ 師　⑤ 至

(ク) 言動にセツ度がなくなる　① 説　② 切　③ 摂　④ 節　⑤ 拙

(ケ) 地方で大きな権セイをもつ　① 制　② 聖　③ 勢　④ 政　⑤ 征

(コ) 人前に出ることにオク病になる　① 憶　② 臆　③ 億　④ 懊　⑤ 奥

模範解答

第一講　模範解答

問１

①　何かを創り上げるわけではなく、既に出来上がっている器を貸し出して、料金を受け取るだけの仕事

②　気が抜けるほど小さく、古ぼけた劇場

（別解：既に出来上がっている器、わずか二百七十席にすぎない小さなこの劇場／この小さな劇場の小さな舞台）

問２　当初の夢とはかけ離れた現実の職場に失望し、本気で転職を考えていたため、退職を覚悟でいつもと違う変化に、かけてみる気になっている心境。

問３　①　退屈な一年が過ぎた。　②　そして劇団の公演の日が来た。　③　その夜。

問４　自分の勤める小さな劇場がすばらしいものを造り出す可能性を知り、転職せず劇場に留まり、これからもどれだけの仕事ができるのか試してみようとの前向きな心境。

問５　創造的に働く夢に比べて小さくつまらなく見え、また物理的にも小さな劇場が、実は大きくて創造的な可能性をもつことに気づいた主人公の心理を表現している。

第二講　模範解答

問1　c

問2　a

問3　b

問4　d

問5　b

問6　人間が他者を判断する時、判断から「自己」は消去できないため、自分自身を判断することになるということ。

第三講　模範解答

問1　「聞く」は音声などを物質的・客観的に耳で受け取ることであるのに対し、「聴く」は相手の心も考えて心を込めて感じ取ることである。

問2　何もせず聴くことが、気持ちの落ち込んだ人にとっては深く支える力となり、理解してもらえなくても楽になるという作用。

問3　相手に迎え入れられる確信がないとき、忘れたい苦しみやふさぎについて他人に話して再度思い出してしまうということ。

問4　聴き手に自分の苦しみやふさぎの理由やいまの状態を整理して語ることで、苦しみやふさぎと距離をとって対象化でき、それらとの関係を変えられること。

問5　本来聴くとは、最後まで聴ききり言葉を受け止めるだけに徹することで、他人には理解できない苦しみやふさぎを抱える人にとって意味が出てくるのに、明快に語ってしまい「わかってもらえた」と勘違いさせるから。

第四講　模範解答

問1　A　4　B　2　C　1　D　5

問2　5

問3　(1)　4　(2)　5

問4　2

問5　1

問6　1、7

第五講　模範解答

問1　1

問2　1

問3　2

問4　A　1　B　2

問5　1

問6　4

復習問題　模範解答

復習問題　第一講　模範解答

（ア）④　（イ）①　（ウ）⑤　（エ）②　（オ）⑤
（カ）①　（キ）③　（ク）⑤　（ケ）⑤　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）就職　（イ）創造的　（ウ）展望　（エ）興奮　（オ）皆無
（カ）縮小　（キ）研修　（ク）臨時　（ケ）容姿　（コ）打診

復習問題　第二講　模範解答

（ア）④　（イ）①　（ウ）⑤　（エ）②　（オ）⑤
（カ）①　（キ）③　（ク）④　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）真剣　（イ）衝撃　（ウ）慈善　（エ）勧誘　（オ）告発
（カ）真相　（キ）暴露　（ク）一概　（ケ）脱却　（コ）洞察

復習問題　第三講　模範解答

（ア）②　（イ）④　（ウ）③　（エ）⑤　（オ）③
（カ）④　（キ）①　（ク）②　（ケ）①　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）幼稚　（イ）感染症　（ウ）意固地　（エ）重篤　（オ）断片
（カ）確信　（キ）過剰　（ク）時系列　（ケ）被災　（コ）緊迫

復習問題　第四講　模範解答

（ア）③　（イ）⑤　（ウ）④　（エ）①　（オ）④
（カ）⑤　（キ）②　（ク）③　（ケ）②　（コ）①

解答漢字一覧

（ア）反復　（イ）分泌　（ウ）処置　（エ）襲撃　（オ）隔絶
（カ）当該　（キ）憤慨　（ク）頻度　（ケ）濃厚　（コ）代替

復習問題　第五講　模範解答

（ア）②　（イ）①　（ウ）③　（エ）②　（オ）⑤
（カ）①　（キ）③　（ク）④　（ケ）③　（コ）②

解答漢字一覧

（ア）錯綜　（イ）示唆　（ウ）醸成　（エ）卓越　（オ）寄与
（カ）傲慢　（キ）資質　（ク）節度　（ケ）権勢　（コ）臆病

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。